

教師を育てた 言葉たち

No. 007

神奈川県立横浜南陵高校

半田昌孝先生

はんだ・まさたか

◎教職歴33年。同校に赴任して2年目。統括教諭。国語科、キャリア支援グループリーダー。

神奈川県立横浜南陵高校 全日制／普通科／共学／1学年約240人／2017年度進路実績(現役のみ):私立大は、専修大、中央大、日本大、法政大、明治学院大、明治大、神奈川大などに延べ179人が合格。短大、専門学校進学55人。就職6人。



初 任校での2年目、初めて担任として受け持った1年生のクラスに、A君がいました。彼は、遅刻などの理由で頻繁に指導を受ける生徒でしたが、ご両親は「学校の指導が悪い」「うちに原因はないのだから、家庭訪問は不要」といった態度で、家庭との連携は困難な状況でした。それでも私は、毎日意識してA君に声かけを続け、A君も私の言葉には耳を傾けてくれました。遅刻せずに登校できた時、「頑張ってるな!」と声をかけると笑顔で応えてくれるなど、彼との関係性は維持できていましたが、生活態度はなかなか改まりませんでした。2学期の半ばを過ぎた頃には、クラスから「なぜ、Aは遅刻してばかりいるのに許されるのか?」と不満の声が出てくるようになり、A君のことでクラスに学校への不信感が広がっていく危機感を覚えました。

このままではいけない、しかしどうすればよいのか分からない……焦燥感に苦しんでいたある日、日頃から私とクラスの様子を気にかけてくれていた学年主任のG先生が、私にこう言ってくれたのです。「**変化をすぐに求めるな**。しかし、自分の信念は貫きなさい。いつかきっと生徒に伝わるから」。G先生の言葉を聞いた瞬間、はっとしました。それまでの私は、自分の教科指導も、そして生徒の成長や態度にさえも、結果が出ることを急ぎすぎていたのかもしれない。G先生の言葉で、教育に対する考えが深まった思いがしましたし、「きっといつか分かってくれる」と思いながら、生徒たちの前に立てるようになったことで、とても気持ちが楽になったことを

今でもはっきりと覚えています。

結 局、その1年間では、A君には大きな変化はありませんでした。そこで私は、もっとじっくりA君とつき合ってみようと思い、「2年生でもA君の担任をさせてください」と、2年生のクラス編成について決める学年会議で自ら申し出たのです。

2年生になってもA君は相変わらずでしたが、もはや私に焦りはありませんでした。「2学期の修学旅行の頃にはみんなと打ち解けられるといいなあ」と見守っていたところ、2年生の後半にはA君はずいぶん落ち着いてきたのです。そして冬には、A君のご両親が、私の家庭訪問を受け入れてくださいました。少し緊張しながらA君の自宅を訪れた私を、ご両親は「半田先生、2年生でもAの担任になってくださり本当に感謝しています」という言葉で迎え入れてくださったのです。2年かかりましたが、教師として大切な気づきを得られたように思いました。

3 年進級時にはクラス替えがないため、生徒たちを卒業まで見続けるつもりでしたが、残念ながら翌年度は他校に異動することになりました。修了式の後、クラスの生徒たちが寄せ書きをくれたのですが、代表して私に色紙を渡してくれたのがA君でした。「俺が渡す!」と彼が名乗り出たのか、それとも「Aが渡せよ!」とクラスみんなが彼に勧めたのでしょうか。少し恥ずかしそうに、そしてぶっきらぼうに「はいっ」と私に差し出した色紙には、「このクラスは俺に任せておけ!」という彼の言葉がありました。